



小松由佳さん(24)

1982年(S57)秋田市生まれ。東京都在住。秋田北高校入学と同時に登山部に入部。1999年熊本国体、2000年岐阜インターハイに出場。東海大学では、女性として初の山岳部主将も務め、カラコンロン山群主峰(パミール)への初登頂など経験を積みます。卒業後も、登山用品店に勤める傍ら、国内外での登山を続けます。

K2に臨んだチーム「東海大学K2登山隊」は同大山岳部の創立50周年を記念し、6月上旬に成田を出発、パキスタンの首都イスラマバードから同月22日にベースキャンプ入りし、ルートづくりなどを経て8月1日、とりわけ難しい南南東リブ(支稜)ルートから後輩の青木達哉隊員とともにアタック隊に参加、8,611メートルの頂を征服しました。女性としては日本人初、世界でも8人目の快挙でした。

自分の価値観でもって登る登山をめざしました」

● 悩みなながらも参加を決意

「進学した神奈川の東海大でも山岳部に入り登山に熱中、週に3日は山に行っていたほどでした。

4年時には中国・新疆ウイグル自治区の未踏峰にもチャレンジ、自分の力で新しい境地に挑むことが楽しいことを学びました。卒業後は就職で迷いましたが、山にかける生活を受け入れてくれる会社もなく、登山用品店(ICI石井スポーツ)にアルバイト店員として勤務しながら山登りを優先しました。しかし一時期、山登りについて悩んだ時期がありました。K2に誘われたのはそ

の頃。自分がどこまで通用するか悩んだのですが、参加を決めてからは再び厳しいトレーニングを再開、カナダにも行き、凍った滝を登るアイスクライミングの訓練も行いました」

● 異文化とのふれあいも魅力／海外での登山

「K2に登ったのは昨年6月から8月にかけて。K2はパキスタンと中国の国境にある山です。国の北側の奥地にあり、車が最後に入る村からベースキャンプまでは徒歩で一週間ほどかかりました。持って行った荷物は約800キロ。そのため荷物を運ぶ地元のパーターを雇います。パーターへの報酬は日本円で1日約600円。現地の男性の一日の平均

収入は300円ほどと、決して豊かとはいえない経済状態ですが、皆とても明るいのです。海外での登山は異文化とのふれあいも生まれます。現地の山岳民族の人々は日本人にない素朴さがありました」

● 標高5kmを超える場所にベースキャンプを設営

「標高5kmを超える場所にあるベースキャンプは、寒暖の差も大きく、草も木も生えていない乾燥した厳しい場所ですが、パーターたちは薄っぺらな民族衣装1枚で寝泊りしていました。それだけの強さがないとこのような厳しい環境では生き残れないのです。食料として連れていったヤギや牛もその場でさばかれたのですが、それは彼らにとって日常のこと。ただ、殺した動物の肉を一片も無駄にしません。私は、首を切られて絶命し人間の食料になる動物の生死を見て、ショックも受けました。日本では、バック詰になった肉を買って食べていますが、彼らは日本人よりずっと命の重みを知っているのでは、と感じました」

● 酸素濃度は地上の約3分の1

「私たちが登ったのは、南南東リ

ブ(支稜)と呼ばれる雪と氷の要素多いルート。K2は巨大な岩の塊で、登るのが非常に難しいと言われ、登る人の多くが命を落とす山です。麓からは首を大きくそらさらないと頂上が見えません。カラコルムには、G4やマツシャイブルム峰、ブロード・ピーク峰など8km級の山が連なっています。山頂付近の酸素濃度は地上の約3分の1。薄い酸素に順応するため、5200m地点にベースキャンプを張り、そこを拠点としてルートを切り開きながら6400m地点(C1)、7000m地点(C2)、7900m地点(C3)と3つのキャンプを張りながら山頂を目指しました」



▲講演会での小松さん(1月19日、市文化会館)

標高8,611mのK2山頂に立つ小松さん。雲海の中に見える山肌(右端)は同じ8km級の連山ブロード・ピーク峰



(岸部市長に贈られた小松さんのサイン入り写真)

「情熱は可能性を生み出す」

▽小松由佳さん講演会「^{ケータ}K2の空をめざして」から

世界第2の高峰「K2(カラコルム山脈、標高8611m)」の日本人女性初の登頂者となった秋田市出身の小松由佳さん(東京都、24歳)の講演会「K2の空をめざして」(主催・鷹巣北都会、が1月19日、市文化会館で開催され、多くの聴衆が人生をかけて危険な登山にチャレンジした小松さんの話に聴き入りました。この話題は、前々号であらましを紹介しましたが、ぜひ講演内容を知りたいとの要望も寄せられていることから、その要旨をご紹介します。

パキスタン北部に位置するK2は、標高こそ世界第2位ですが、平均斜度が45度を超えるなど険しい地形のため世界で最も困難な山とされています。昨年は7隊が挑戦しましたが登頂したのは東海大隊とイタリア隊の4人だけ。小松さんは、登頂を目指すアタック隊のメンバーに選ばれ、「世界最年少登頂」となった後輩の青木達哉さん(22)とともにこの頂きに立ちました。

講演要旨

● 競技登山から「創る」登山へ

「小さい頃から太平山を見て育ち、山に憧れを抱きました。秋田北高の登山部で初めて山登りをし、山の魅力に取り付かれました。しかし、高校時代の登山は主にインターハイや国体を目指した競技登山でした。国体やインターハイをめざし一生懸命トレーニングもしました。しかし大学ではもっと違うことをやりたいと、

轟音を発して落ちてくる 冷蔵庫大の岩の塊

「ベースキャンプからは氷河が見えます。氷河にはいろんなものが埋まっっていて、ときには過去に遭難してなくなった人の遺体も出てきます。近くを歩いていて人の腕を見つけたこともあります。寒暖の差も大きく、零下20度から気温が上昇すると摂氏20度にもなるのです。またK2は平均斜度が45度以上あり、両手にアックスという道具を持ち、それを斜面を刺しながら這うようにして登ります。風が強く、引き剥がされそうになったり、また雪崩や落石も多

く、冷蔵庫大の岩も轟音を発して落ちてきます。判断を誤ったら死ぬかもしれないと恐怖を感じました。登山技術や体力が及ばない自然の脅威の前では、ただ祈るしかありません。しかし、運・不運はこれまでやってきたことの結果だと思いながら登りました」

アタック隊に選ばれる

「登頂に挑むアタック隊には、自分のほか後輩の青木達哉隊員と4つ先輩の蔵元隊員の3人が選ばれました（蔵元隊員はその後、事情により途中で下山）。C2からC3キャンプにかけては落石がひどく、最初は体が震えました。この地点には前に登った隊が残したごみがテントごと残っていました。中には、10人ほどの遺体も放置されているといわれていたのですが、恐くてのぞきませんでした。午前2時、2人の体をロープで結んでC3を出発、深い雪の中をラッセルして少しづつ進みました。2人の間には究極の信頼関係がありました。酸素も薄くとても辛かったのですが、酸素ボンベを使いはじめたのは8km付近から。出発してから14時間登り続け、ついに山頂に到着しました。ゴッグルの中は涙であふれ、めくばせで互いに登頂を確認

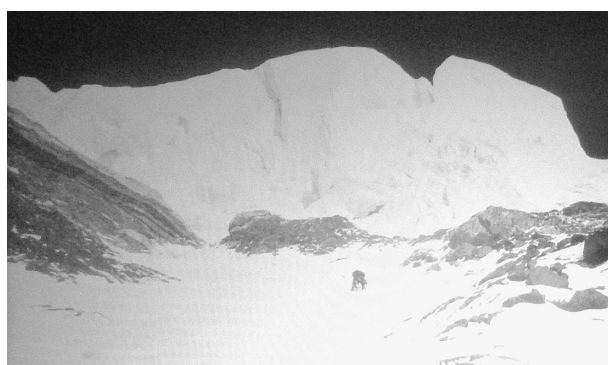


▲東海大隊が切り開いた南南東リブ（支稜）登はんルート。K2には一般的ルートはないといわれる

し合いました」

地球の丸さがわかった

「到着時には雲がかかっていたが山頂が見えなかったのですが、次第に晴れてきて雲が下に広がり地平線の端がくぼんでいました。地球が丸いんだということがよくわかりました。しかし、登頂の感動は半分しかありませんでした。下りも非常に危険だからです。滑落すると死が待っています。一瞬のミスも許されません。慎重にゆっくりと下りました。時間をかけたため酸素も切れました。ヘッドランプの電池もなくなり、予備の電池もつかないアクシデントも重なりました。その上、疲労と眠気で



▲アタックの核心部「ボトルネック」といわれる山頂の手前に立ちはだかるセラック（氷塔）を前に

判断力が鈍りました。私は『第六感』を信じています。これ以上無理に下山を続けるのは危険と判断し、斜面を少し掘ってビバーク（不時露営Ⅱ予定外の理由で下山できず、山中で一夜を明かすこと）することにした。無線でキャンプに連絡したのですが、その場所からは地形の関係で交信ができなかったのです。キャンプでは遭難したのではないかと心配したようです」

下山後 メンバーと喜びの再会。しかし……

「ビバーク後、C3まで下って休み、翌日一気にベースキャンプまで



▲C3キャンプを出て14時間、ついに登頂を果たし、小さな日の丸を掲げる小松さん

戻りました。みんなと再会したときには抱き合って喜び合いました。生きていることをここまで幸せに感じたのは初めてでした。下山後、みんながお祝いをしてくれました。外国の隊とも交流しており、ロシア隊はランチに招いてくれました。しかしこのロシアのクライマーたちは私たちがK2を去るその日、雪崩にあって4人とも亡くなったのです。自分たちも何かが違っていれば同じ運命

だったかもしれません。生き残ったのは運がよかった、と思っています」

貧しくとも豊かな人生を送っている地元の人々

「ベースキャンプを去る途中の村では、ポーターの人たちがダンスをしてくれました。笑顔が自然。感受性があり表情が豊か。山を登るだけでなく現地の人たちとの交流の中か

らも学ぶことが大きかったように思います。今の勤務先は新宿なので、家から電車で新宿に向うのですが、車内では無表情で死んだような目をしている人を多く見かけます。一方、パキスタンの人たちは与えられた環境の中で自分の生を受け入れ、幸せを精一杯見つめています。今回私は、すばらしいチームのメンバーとともにK2登山に参加し、多くのことを学びました。かつて目指していた『強いクライマー』になることだけではなく、ポーターたちの生き方を見たことで、人間としてどれだけ豊かに生きられるかを考えさせられたように思います」

情熱は可能性を生み出す

「今は経済的に厳しいアルバイト生活。友人はOLになり、結婚をして子どもを産んで普通の生活をしている中で自分はもうなるのだろうか、という不安もあります。しかし、それぞれの生き方があると思っています。今は、やりたいことをやっている自分に満足しています。好きな言葉に「パッション クリエイティブ ツシビリティ（情熱は可能性を生み出す）」という言葉があります。目標に向って努力すれば可能性は開けてくる、そういった意味のことばで



▲下山後、登頂を喜んでくれたロシア隊と。この4人は、K2を去る日、雪崩で帰らぬ人となった

「植村直己冒険賞」を受賞

小松さんは2月16日、冒険家の故植村直己さんの功績を記念した「植村直己冒険賞」を受賞しました。同賞は植村さんの出身地・兵庫県豊岡市の主催で、優れた冒険をした個人や団体に贈られるものです。おめでとうございます。